

【『琅』三十七号・あとがき】

本号の原稿が出そろう、割り付け・校正の作業に入った十月十四日の朝日新聞（朝刊）に、気になる記事を認めた見出しに「高校の国語 文学を軽視？」とあり、二〇二二年度から実施される新しい指導要領を巡って、文科省の視学官と日本近代文学会の理事が、それぞれの立場から意見を述べるというものである。

この記事に目が留まったのは、個人的な理由による。定年退職を機に始めたフランス語の再学習で手にした教科書を見て愕然としたことを、本誌第三十五号に記した。当該の教科書は、さまざまな雑誌や新聞、ウェブページを切り張りしたような作りになっていて、まるでコラーージュ作品のような印象を受けたのである。

こうした教科書の傾向は、フランス語だけでないらしい。「物語を忘れた外国語」（黒田龍之介著・新潮社）によれば、欧州には、ヨーロッパ言語共通参照枠なるガイドラインがあり、最近の語学教材はこれを基準に作られているのだが、それは「新聞の社説とか、小説の抜粋とか、そういういったものを切り張りしただけの印象」ということである。語学の専門家にそう言われ、筆者のコラーージュという認識は、あながち間違えではなかったと考える昨今である。

さて、件の新聞記事はどう受け止めたらいいのだろうか。文科省の言い分は、「今回の学習指導要領の改訂では（中略）実社会で求められる国語の能力を育てることに配慮し」「授業では資料に基づいて話したり討議したりする活動を例示し」ているが、「文学を軽視しているわけでは」ない、とのことである。

他方、文学会は、「・・・理解しがたい考え方にぶつかったとき、感情や心理を言葉で表現し、分析する力を磨くことこそが、実践的な論理的思考の向上につながる」と

して、新指導要領で、文章を「『論理的』『実用的なもの』と『文学的なもの』に分けること自体」が問題であるとしている。

コラーージュ教科書で学びながら、パリの街角に掲げられている音楽会のポスターを読んだり、ウェブサイトに掲載されている某国で開催される砂漠横断ラリーへの応募を考えたりにすることに馴染めないものを感じていたのだが、先の新開記事に、大学入学共通テストの国語のモデル問題として、「駐車場の契約書や景観保護ガイドラインを読み解くこと」を求めたものがあつたというのを読んで、「国語教育よ、お前もか！」の思いを強くしたのである。

手元にある「フランス語解釈法」（伊吹武彦編・白水社）には、語学学習にとって大事なことは「原文の表現しようとする思想や感情を、できるかぎりの確に感得し把握する能力を養うところにある」とある。肝心なのは「思想や感情」であり、ポスターや契約書ではこうした能力は養えないのである。これは、外国語学習に限ったことではなく、国語学習にも通じることではないか。

「実用国語」に充てられる実際の授業時間数は、それほど多くはないのかもしれないが、こういうことは、時間数の問題ではなく、何を大事にするかという心の問題なのである。

（次号原稿締め切り日） 二〇二〇年三月末日

（茂治）

『琅』三十七号 二〇一九年十月 発行
編集・発行人 松村 茂治
発行所 252-143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19
「琅の会」 Ⅲ（〇四二一七七三一五九二七）
印刷所 株式会社ポプルス